

2025 年度

国内体験学習プログラム in 高島

「自分で選ぶ 暮らす場所、生きる場所」

参加学生レポート集

ボランティア・NPO 活動センター

今回の高島体験フィールドワークを通して、最も印象に残ったのは、「高島市の方々が自分たちの地域や人々と真剣に向き合う姿勢」でした。

フィールドワーク以前は、高島市について「人口減少や高齢化が進んでいる」「地域資源が豊かである」といったデータ上の情報しか知りませんでした。しかし、実際に現地を訪れ、地域の方々と直接お話しすることで、地域の温かさや“生きている地域”としての姿を感じることができました。

特に印象的だったのは、地元の方々が自分たちの地域について、良い面だけでなく課題も含めて高島について、正直に、そして誇りをもって語ってくださったことです。現状にしっかりと向き合い、「どうにかしたい」「高島市をより良くしたい」と考えておられるその姿は、とても力強く感じられました。

私自身は、自分の地元について深く考えたことがありませんでした。これまで「就職したら都会に出たい」「都会の方が魅力的だ」と思ってきましたが、今回の経験を通して、地元の良さや、当たり前だと思っていたことが実は貴重なものであったことに気づかされました。私ももっと、自分の地域について知り、地元と向き合ってみたいと思うようになりました。また、今回のフィールドワークでは「人と人とのつながりの大切さ」も強く実感しました。

是永弥里さんのお話では、大学を機に、京都に出てみて初めて高島の人の温かさや、日常のつながりのありがたさに気づいたとおっしゃっていました。実際の体験活動を通じて、そうした人との交流が、高島の大きな魅力のひとつであるように感じました。

例えば、わら細工や畑作業のお手伝い、福祉施設などでの交流を通じて、地域の暮らしぶりや日常のエピソード、高島の住民の方々の人柄に触れること

ができました。こうした温かさは、データだけではわからない、実際に訪れてみなければ感じることでしなかった貴重な経験だったと思います。

もちろん、「お互いに名前を知っているような関係」は、時にはわずらわしさやプレッシャーを感じることもあるかもしれません。しかし、そうした密な人間関係があるからこそ、「この地域を残したい」「もっと良くしていきたい」という思いにつながっているのではないかと感じました。

人への思いと、高島への思いは、きつとつながっているのだと思いました。高島の方々が自分たちの暮らす地域を大切に思っていることが、今回のフィールドワークを通して伝わってきました。私自身も、高島の皆さんのフレンドリーさや温かさに惹かれました。私も今回、高島縁人になれてうれしかったです。ぜひまた訪れる機会があればまた高島に訪れたいと思います。

今回、国内体験プログラム in 高島に参加した目的は以前から関心のあった地方創生について学ぶためだった。高島に惹かれた理由は、私は小学生のころ何度か高島にキャンプに行ったことがあり親近感を覚えたからである。また、プログラムを通して新たな視野や価値観を獲得するため参加した。

三日間のプログラムで二つ印象に残っていることがある。一つ目は TAKASHIMA BASE での瀬川さんのお話だ。「自分はこういう性格だからこの職業が向いている」というような自分に当てはまることを考えるのではなく、自分が変わっていくことが重要なのだと話していた。人との出会いや関わりによって人の可能性は変わる。自分で将来の選択肢を増やしていくという考え方に感銘を受けた。自分の人生を自分で選ぶという点で、これから自分がどのような人生を歩んでいきたいのかを考えるきっかけとなった。私はこれまで就きたい職業やなりたい自分像が見えず、悩んで落ち込んでしまうことがあった。しかし、無意識のうちに自分の可能性を狭め、自ら選択肢を限定していたことに気が付いた。今回のプログラムで出会った高島の方々やメンバーのみんなとの縁を大切に、自分の可能性について考えていきたい。

二つ目は是永弥里さんのお話である。一番年齢が近くなぜ高島を選び続けるのか興味深かった。お話を聞くまでは小さくとも親密なコミュニティでのびのびと成長できそうだと想像していたが、実際は地域が小さいと窮屈でみんなに名前を知られているというプレッシャーがあると知った。お話を聞かなければ気づけなかったであろう、実際に過ごして経験した方の生の声だと感じた。弥里さんは窮屈さから解放されるため大学進学を機に京都で一人暮らしを始めたが、隣人の顔を知らないことや動物の鳴き声が聞こえないことなど京都に出て地元の良さに気が付いたと仰っていた。これ

を聞いて、私自身住んでいる地域の良さがすぐには思い浮かばず、表面しか見えていないことに気づかされた。

三日間を通して高島の方々の高島が好き、盛り上げていきたいという熱意を強く感じた。無難に進めばいい、冒険しないことが一番良いと考えるのではなく何か変化を起こすためにどうしたら良いか向上心を持って考えていることが印象的だった。コスパ・タイパでは測れない生活に触れることができたと感じる。自身の将来を考えるきっかけや、新たな価値観・考え方など参加したからこそ得られたものが多くあった。

参加にあたっての目標として積極性を身に着けることを挙げていた。人と関わることに對しては、学年・学部関係なく積極的に声をかけたり交流したりすることができたが、自分の意見を発言することはまだ苦手だと再認識した。思ったことを言語化することが苦手な時間がかかる。今後もボランティアやその他のプログラムなどに参加し、苦手を克服できるよう努力していきたい。

私は、小さい頃から引っ越しが多く、一つの場所に居続けるということ、生まれてからずっとという経験がありません。そのため、どこか、「何かあれば引っ越せばよい」。そんな風に、住むということがどこか軽いものでした。

今回の体験学習で出会った方々のお話と対話は私にとって印象深く、また、衝撃を受けるものでした。きっとこれらの経験は私の人生において重要な発見と成長をもたらしたと思います。そのような思いを抱かせた、印象的だった瞬間を書きたいと思います。

まず、加藤さんという市役所にお勤めされている方にお話を聞く機会があり、その中で印象に残った言葉がありました。お話を聞く機会があったのは1日目の夕飯の場で、グループで分かれてそれぞれの席で現地の方と会話をするというものでした。そこで加藤さんは「もうどこかへ行きたい」「引っ越そうと思っている」と言いました。その時に、「では、なぜ今も高島市に残っているのか」とお聞きしました。そうすると、「恩を返すため」と答えられました。その時の私にはなるほどそうか、と深くは考えませんでした。けれども、加藤さんの言葉は、心に引っかかって最終日になってもずっと「なぜ?」という自分でも分からない問いで残り続けました。

2日目のプログラムで訪ねた椋川という集落では、高齢者が独居で住んでいました。「便利な都会へは行かず、不便であると言えるこの集落に住み続けるのはなぜだろう」「なぜ、引っ越さないのか」「なぜ居続けるのか」と不思議に思いました。

私は、とうとうプログラム終了後も加藤さんの「引っ越そうと思っている」、「恩を返すために」、

という言葉の裏にある思いに気付けませんでした。また、椋川の人たちが暮らし続けることも理解することが出来ませんでした。きっと、そのまま私1人では分からないと放り投げたことにすら気付かずにいたと思います。適当に自分で納得のいく理由を脳内で作り上げて、勝手に理解した気になっていたと思います。そして、最初から疑問なんてなかったと忘れてしまっていたと思います。

また、他に印象に残ったのは、1日目に高島ベースでお話を聞く機会があった、子どものあしたコーディネーターの是永さんです。是永さんは困難な状況にいる子ども達のための居場所づくりの活動をしている方でした。是永さんの話で、私の中にある子どもの頃の自分が長い時間をかけてその瞬間、急にタイムスリップして救われたような気になりました。過去、私は不登校の時や、放課後の教室に通うことがありました。長いこと、考えもしなかったその空間で当たり前のように感じられた「安心感」は、このような思いで作ってもらっていたのか、誰も味方がいないとおびえていましたが、そんな私をそっと支えて下さった方々がいたことに気づき、お話の最中泣いてしまいそうになりました。

今回の体験は、冒頭で述べたように、私にとって非常に衝撃でした。そして、私の人生においても非常に重要な瞬間だったと思います。私は、今は何も誰かに何かをしてあげられる役割を持っていません。でも、いつか、是永さんや加藤さんのように受けた「恩」という名の温かい絆を誰かに返し、つなげていけたらと思います。

このプロジェクトに参加することで高島市は自然が豊かで、多くの高島の方が町をよりよく、暮らしやすくしようと様々な取り組みをされていることを知った。過疎化が進む中でも地域の人同士の助け合いにより、あたたかい町ができていた。

人口の少ない町で暮らすには地域の人との繋がりが不可欠になる。だが、この地域の濃い繋がりが暮らしていくうえで逆に負担に感じてしまうこともあるようだ。それでも、高島市のように人口減少が進む地域で必要となるのは「交流の場」であると感じた。交流することによって互いに信頼関係を築き、安心して暮らすことができる。また、高島市は自然が豊かで、買い物など日常生活に車での移動が必要不可欠だ。車移動が多くなり、地域住民の日常的な交流の機会が少なくなっているという現状がある。このような交流の少なさを改善すべく、毎年イベント（おっさん！棕川）を行ったり、観光資源（ヴォーリス通り）を保護したりするなど工夫がなされている。特にこの毎年行われるイベントによって高島市以外からの観光客が訪れる機会や、高島市に住む祖父母のもとへ帰省する機会にもなっている。このような高島市の取り組みを他の人口減少に悩む地域も取り入れ、積極的に「交流の場」を設けることはそこに暮らす人々の生活が楽しくなるだけでなく、新たな移住者を得て人口減少を解決するきっかけにもなると感じた。

しかし、このような「人口減少に悩む地域には人口を増やす何かをしなければならない」という単純な考えは間違っているのかもしれない。実際に高島市に住んでいる方の中には、人口減少には悩んでいるものの人がたくさん増えて欲しいわけではないという考えを持つ方もいた。人口が増えたら様々な考えを持つ人が増えること

になり、対立することがあるかもしれない。人口が増えれば増えるだけよくなっていくだろうという上辺だけの考えを持っていた自分に気づかされたのだ。そこに昔から暮らしてきた方々がどうしていきたいのか、といった意見にまず耳を傾けることが最優先ではないのだろうか。

そうは言っても、人口が少なすぎても日常生活や生産活動を行う上での問題が出るし、人口が増えても上記の問題や財政費用増などの問題も出る。どのような状態であっても悩みは尽きないと感じた。日本全国で問題となっている、人口減少の進む地域にはどのように対処していくのがよいのだろう。今回の国内体験プログラムに参加することで実際に現地の方の思いを聞き、今まで自分になかった価値観に触れることができた。そこから新たに疑問も生まれ、視野が広がったようにも感じた。これからも様々なプロジェクトに参加するなどして、難しいとは思いますがこの人口減少による問題の最適解を見つけていけたらと思う。

私が今回の地域体験プログラムに参加した理由は、将来的に地元での就職を希望しており、高島市の取り組みや地域の声を直接聞くことで、地方公務員としての役割をより具体的に考える貴重な機会になると感じたからである。プログラムに臨むにあたり、ただ「見る」だけで終わらせるのではなく、「聞く」「感じる」「自分の言葉で考える」ことを意識した。現地で多様な方々と交流し、地域の自然や暮らしに実際に触れる中で、机上の知識では得られない多くの学びを実感できた。

中でも特に印象深かったのは、地域の方々が語っていたリアルな課題である。たとえば、「人材確保のために人を集めても、短期的な目的で来る人が多く、なかなか定着しない」といった声があった。また、「イベントの開催が目的化しており、その準備や片付けを担うのは結局地元の住民で、負担が大きい」という現状がある。こうした声から、地域活性化とは、外から何かを「与える」ことではなく、地域の人々が無理なく、持続可能な形で続けていけることが最も大切であると強く感じた。

また、若者が地元を盛り上げようと奮闘すると、地元の方から「学生には任せられない」と言われたということも印象的だった。その言葉の背景には、これまでの経験から生まれた不安や、信頼関係を築くことの難しさがあると感じた。地域づくりにおいては、一方的な支援ではなく、地域内外の人が対等な関係で関わり合い、少しずつ信頼を積み重ねながら、継続できる仕組みを作ることが欠かせない。

今回の体験を通じて、一つの疑問が生まれた。それは、「地域と外部の人とのつながりを、どうすればお互いにとって意味のある形で持続できるのか」ということである。考えていく過

程で、関わること自体はできても、それをどう続けていくかは簡単ではないということにも気づかされた。私はたとえば、TAKASHIMA BACEのカフェのように、人と人が自然に交差する立ち寄り場がもっと増えることで、そうした隔たりを埋めるきっかけになるのではないかと考えた。施設やイベントといった目に見えるものだけでなく、信頼やつながりといった見えにくい要素にも目を向けた取り組みが重要である。

報告会では、地域の方々から伺ったリアルな声をもとに、「地域の持続可能な発展には、一過性のものではなく、持続的で互いに意味のあるものにしていく姿勢が欠かせない」ということを伝えたい。また、自然と文化のつながりや、人との信頼関係が地域づくりに与える影響についても、具体的なエピソードや写真を交えながら紹介する予定である。

私がこのプログラムに参加するきっかけとなったのは、高島市の椋川地区を訪れることだった。人口わずか 17 人の小さな集落で、毎年『おっさん椋川』という収穫祭が行われ、なんと 1000 人近くが集まると聞き、非常に驚いた。少子高齢化と人口減少が進む中で、なぜこのような祭りを続けられるのか。その理由を、実際に現地の方から直接伺うことができたのは、今回の体験で最も印象に残っている。

お話をしてくださったのは、椋川在住の是永さん。『おっさん椋川』は今年で 22 回目を迎えるが、その背景には「やめずに続ける」という強い思いがあった。コロナ禍では事前告知をせず、当日限定で小規模に実施するなど、形を変えてでも継続した。台風の影響で中止の危機にあった年も、昨年まであまり積極的でなかった地域住民が「やろう!」と声を上げ、協力して乗り越えたという。この話から『おっさん椋川』は単なるイベントではなく、地域の誇りであり、住民の心のよりどころとなっているのだと感じた。

また、継続の工夫として、祭りの際には地元出身の方や孫の世代も集まり、世代間交流が生まれている。こうすることにより、訪れる側も同世代がいることで安心して参加しやすくなり、祭りは地域内外の人をつなげる機会にもなっている。実際、『おっさん椋川』は一度きりの観光ではなく、地域と継続的につながる『関係人口』を生み出すきっかけにもつながっていると感じた。

この『関係人口』は、今後の地域づくりにおいて重要な要素だと思う。定住人口だけでなく、外部の人々が関わり、支えることで、地域は維持・発展していく。椋川のように、少人数でも続ける努力を惜しまなければ、地域の魅力は発信でき、人とのつながりも広がることを学んだ。

一方で、最終的には移住者の受け入れが課題となる。しかし、それは地域のコミュニティを守りつつ慎重に進める必要があり、地域活性化は難しい課題であると再確認できた。

今回の体験は、『どこで暮らすか』『どう生きるか』を考える大きなきっかけとなった。人口の少ない地域では、一人ひとりの役割が大きく、支え合いの実感がある。椋川の人々の姿から、自分の生き方を見つめ直すヒントを得られた。

私の地元である和歌山県有田市も人口減少の課題に直面しているが、椋川のように「続けること」と「外とのつながり」を大切にすれば、未来を切り開く可能性がある。まずは、地元の伝統や取り組みを知り、自分なりに発信していけるような知識を身に付けることから始めていきたい。

私が今回、国内体験学習プログラムに参加した中で最も印象に残ったのは、人と人とのつながり、そして地域とのつながりの大切さです。お話を聞かせていただいた方々の多くは、地域との関わりを通じて地域に貢献していたり、人と人とのつながりを作ったり、逆に人とのつながりが地域に留まるきっかけになっていたりと、いずれもつながりが生き方や地域社会との関係に大きな影響を与えていると感じました。このことから、地域社会の形成において最も重要なのは、人と人、人と地域との結びつきであると考えました。

また、交流を通して気づいたことは、過疎化や少子高齢化が進む地域では、必ずしも地域外から新たな人を呼び込むことだけが解決策になるわけではないということです。以前まで私は、地域活性化のためにはいかに地域外から人を呼び込むことができるかが大切であると考えていました。しかし、畑地域やその他でのお話を聞いて、地域側の受け入れ体制が十分でない場合や、どのような人でも歓迎されるわけではないこと、さらには新たにきた人が長期的に定住するとは限らないことなど、様々な課題があることを知りました。また、加藤さんのお話からは、新しい移住者の増加や地域活性化のみに目を向けるのではなく、昔から住み続けている地元の方々を尊重するという視点を学びました。特に、伝統文化や地域特有の魅力は地元の方々によって受け継がれ守られてきたものであり、移住者ばかりが増えてしまうと地域の良さが損なわれたり、分裂を招く可能性もあることに気づかされました。そのため、地域を支える地元住民と、新たに加わる外部の人々がバランスよく共存することが重要であると考えました。

さらに畑地域での体験では、降雪や坂の多さ、交通の不便さ、農業という職業の不安定さとい

った厳しい側面を知る一方で、手を挙げるとそこがバス停でなくともバスが止まってくれることや、顔見知りが多いといった地域の温かさについても知ることができました。こうした経験は、今まで身近でなかった地域の姿を感じるきっかけとなりました。さらに、棚田のボランティア活動やグループ農業のお話を通じて、移住しなくても農業や地域と関わるができる可能性についても学びました。

これらを踏まえて今後私がさらに深めたいことは、地域の方々がどのような人に来てほしいと考えているのか、また移住者が地域とどのように関わり続けているのか、あるいは関わりたいと思っているのかという点です。これらの視点を探ることで、地域社会の活性化についての知見を広げ、今後自分の大学での学びにも生かしていきたいと考えています。今回学んだことをそのまま終わらず、現実の地域課題に応用できるように取り組んでいきたいです。

この度は貴重な経験をさせていただき、ありがとうございました。

私は今回、滋賀県高島市で二泊三日の国内体験学習プログラムに参加した。普段の生活では触れる機会の少ない地域での滞在を通して、自然と人々の暮らしに触れることができ、多くの学びを得た。その中でも特に印象に残り、新たな発見となったのは、初日に訪問した川島酒造での見学である。

川島酒造では、「地酒から風土を知る」という理念を掲げている。この言葉のとおり、酒造りは単なる製造業ではなく、その土地の気候や風土、さらには人々の暮らしを知らせることを学んだ。また、酒造りに欠かせない水は琵琶湖の恵みによるものであり、地域の自然環境が深く結びついている点が印象に残っている。地酒は地域の象徴であり、作られた日本酒の一杯一杯にその土地の歴史や文化を感じられるのだと考えた。

また、新たな発見だったのは、酒造の社長が積極的にインバウンド需要に取り組んでいる姿勢である。日本酒は海外でも高く評価されており、「地酒から風土を知る」という考え方は外国人にとって大きな魅力となっているという。観光客が酒を通して地域の文化を理解し、日本の風土を感じ取ることができる点に着目した社長は、お酒の輸出に力を入れていた。酒造りが単に地域産業にとどまらず、国際交流の手段になっていることを知り、視野が大きく広がった。

外国人のニーズを考え、日本酒だけではなくウイスキーの製造にも挑戦していることを聞き、とても驚いた。地域密着型のイメージがある酒造が、世界を意識して新しい挑戦を続け

ている姿が印象的だった。私が持っていた「地域に密着し、伝統を守るだけの産業」という固定観念を覆すものであった。川島酒造の取り組みを通して、地方からでも国際的な発信が可能であり、地域の伝統や自然を生かすことで可能性が広がることを実感できた。

今回の体験を通して、私は「地方の酒造と世界とのつながり」という新たな視点を得ることができた。地域で守り続けられている伝統や自然を活用した取り組みが国内外の人々を惹きつけていることを学んだ。高島市のような地域には、まだ気づかれていない価値や魅力が多く存在しており、それを発見し共有することが、これからの地域の発展につながると感じた。

二泊三日の短い期間ではあったが、川島酒造での学びは私にとって大きなものであった。今回の発見を通じて、自分の住んでいる地域を新たな視点から見つめ直す姿勢を持っていきたい。

私が本プログラムに参加した理由は、大学での専攻科目の学びを深め、将来どこで暮らしていくのか考える機会にして進路選択の一つにしたいと思い参加しました。私自身大学を機に、関西地域に移り住んだ。なぜ、地元を離れたか振り返ってみた。おそらく、コミュニティの狭い地元から知らない土地で暮らすことで知らない価値観や人に出会えるのではないかと当時は思った。今回、高島市に訪れたことも新たな価値観、人との出会いを大切に、体験を通じての学びと自身の変化について述べる。

ツアーの目標としては、高島は移住者支援や子育て支援が充実しているが、若者の流出や人口減少に伴い故郷に帰ってくる若者の減少や伝統文化の後継者不足など現代の過疎地域と同様の問題が起きている。そんな中で、高島市ならではの官民連携や福祉政策を学ぶ。

学び

TAKASHIMA BASE を中心に人が繋がる場を形成しているように感じた。

私は、就職すると人との繋がりやコミュニティが限られてくるのではないかと考えていたが、TAKASHIMA BASE に訪れる方々は地元、移住者、館若者から高齢者、外国ルーツの方まで幅広い年代、価値観が集まる場所であった。特に移住者にとって、知らない土地でコミュニティを作ることは容易ではないが、受け合い、繋がりながら生活している高島の住民、地域の魅力を見つけた。そして、普段関わらない他職種（行政・民間・農家）が関われる居場所

からまちづくりの起点となり、地元民や移住者を巻き込む苦労や難しさ、面白さを交流から学んだ。

体験を通じての、私自身の考え方の変化

①街のポテンシャルの深さに気づけるか（地元の強み）②地元の形成過程を遡る（歴史・商業）③都市部と地方の暮らしの違い（考え方・文化・伝統・近所付き合い）に目を向けたと思った。

今まで18年間地元で育ったが、地元のまだ知らない魅力や良さに気付いていない。伝えたくても気づいていないため上手く伝えることができないことが幾度もあった。それぞれの地域の形成過程や歴史は異なっているため、地元や関西地域だけでなく訪れた地域の特性を調べていきたい。また、地元民と移住者では、地域を捉える視点が異なっていると感じた。その中で移住者ならではの、外からの視点もまちづくりに必要不可欠であると考えた。

今後は、全国共通している過疎、少子高齢化問題に対して、①どのように地元に戻ってきてくれるまちを作っていくか ②大学進学、社会人になり、地元を離れると故郷に帰ってこない、といった課題に向き合うために必要なことは何か、地元や住んでいる地域に焦点を当てながら行政の策を踏まえながら考えていきたい。今回のプログラムの中で、社会福祉協議会の職員のお話から知り得た知識を専攻研究に活かし、進路に向けて知見を広げていきたい。

私が学んだことは、清風荘の林さんからしていただいたお話の中にある。一般的に『福祉施設は地域の対極にあるもの』という認識が強いが、『施設も地域の一部』という考え方をすると、地域と人、人と人などが繋がることのできる場所が出来るというものだ。

今回は福祉施設だったが、児童館など様々な施設に言えることであると思う。林さんは「福祉施設は用事や知り合いがいないと来ない場所であるが、ふらっと入ってもらえるような繋がれる場所でありたい」と話していた。私が通っていた小学校には子ども会というものがあり、普段は関わるのが少ない学年に友だちができ、廃品回収などの活動の中で地域の方と関わるのがあった。小学生のときは人や地域と繋がりがあり、子ども会を通して充実した日を送ることができた。中学生、高校生では地域と繋がることはなくなり、部活動で先輩、後輩ができるぐらいであった。大学生になり、ボランティアセンターが運営している行事に参加することで、地域の方や普段関わることの無い学生と関わる事ができた。しかし、自分から行動しない人や関心のない人は人や地域との繋がりがとても少ないのではないかと感じる。そこで、地元やひとり暮らしをしている地域と繋がりを持つことができるようにするためには、林さんのような考え方はとても重要であると思う。人により、人や地域と繋が

りたい度合は違うが、私は繋がりがゼロであることは望ましいことだと思わない。これは国内体験学習を通して、1人で生きていくことは難しいこと、繋がりがないと困ることがあること、前提として地域の中に繋がりがあることなど、様々なことを感じたからである。

そして今回私は、地域と繋がりとまで言って良いのかわからないが関わりを持ち、やはり私の住む地域や人、将来住む地域や人、将来仕事をする周辺の地域や人と繋がりをもちたい、役に立ちたい、林さんのように考えている人がいる地域に住みたいと気づくことができた。これにより、国内体験学習のテーマである「自分で選ぶ 暮らす場所、生きる場所」を考えることができた。

施設が繋がれる場所でありたいというための方法の1つが『ぽこフェス』ではないかと思う。調べるとテーマは『ぽこっとふくしをちいきにひらく』であった。振り返りを行い、上記で述べたことを考えることができたため、ぽこフェス以外に行っていることがあるのか聞けなかったことが心残りである。国内体験学習を通して、繋がりを意識して過ごしていきたいと思い、深草ふれあいプラザ 2025 のボランティアに応募した。学生だからこそその積極性を持って、これからも「自分で選ぶ 暮らす場所、生きる場所」や地域の政策、特に地域活性化について考えていきたい。

高島での国内体験学習プログラムを終えて、私は「人と人との繋がり」こそが高島が持つ最大の魅力であると感じた。

高島市の中にはいわゆる過疎地域があり、多くの不便を抱えている。スーパーやコンビニが少ないのはもちろん、若者が働ける環境も限られているため、他府県への人口流出が続き、地域の存続が危ぶまれているところもある。

大阪で生まれ育った私にとって、高島の生活は驚きの連続だった。1時間に1,2本しか走らない電車、チェーンではなく個人商店が点在する駅前。廃業間近のスーパーマーケット。バスの窓から流れる田園風景。一つ一つの光景がノスタルジックで心惹かれる一方で、「ここで暮らし続けること」への疑問も湧いてきた。人々はどこに魅力を感じ暮らし続けているのか。また移住を決めた人々は何を決め手としたのか。そんな疑問を解消してくれたのがスタディツアーで出会った皆さんだった。彼らに共通していたのは人間関係の豊かさだ。ぼくみんの大澤さんと瀬川さんはTAKASIMA BASEで地域の方々を巻き込み様々なイベントを企画していた。湖西中学校地区で民生委員をされている大藤さんは、子どもたちや地域住民との強固な連携を築いていた。棚田ハウスの橋本さんはご家族や地域の方々、そしてハウスの会員さんとの繋がりが見て取れた。

中でも是永弥里さんのお話は特に印象に残っている。社会福祉協議会の職員である母と、

市議会議員の父を持つ弥里さんは両親を尊敬する一方で、周りからの期待を重荷に感じていた。生まれ育った高島市棕川という地域に窮屈さを感じていた。大学進学を機に京都に移り住んだ彼女が感じたのは都市部の「寂しさ」だった。高島では当たり前だったご近所付き合いも京都ではほとんどない。都市部での経験を通して高島の素晴らしさに気づいた彼女は、再び棕川へ戻ることを決意したのだ。

確かに、高島市は不便かもしれない。しかし、その「不便さ」があるからこそ、人々が助け合い、深く繋がることで、より豊かな生活が送れるのではないだろうか。私自身、都市部に暮らす中で家族や親戚以外の繋がりが希薄であるように感じている。大学生のうちは出会いに恵まれているが、社会人として都市部に暮らす際、今以上のコミュニティに参加できる自信はない。

これまでの私は過疎地での生活は選択肢として考えていなかった。「コンビニ、スーパーまで家から車で40分なんてありえない。」という思いから田舎での暮らしを敬遠していた。しかし、国内体験学習プログラムを通して視野が広がり、田舎での暮らしも一つの魅力的な選択肢となり得ることに気づけた。そして、私の人生において「繋がり」が最も重要なものであるということに気づけた。今回の学習プログラムで出会えた人々との繋がりを大切に、また新たな出会いを求めて、今後も高島市を訪れたいと思う。

この3日間の活動を通して、どこで暮らし、どの様に生きていくかについてとても考えるようになった。私自身、田舎に分類されるところで生まれ育ち、地元の良さを感じており、何か還元したいと思う気持ちを漠然と持っている。高島市で出会った地元住民の方や、そこに移住してきた人たちの思いや生活に触れ、皆さん高島市がとても好きなのだと感じた。

なぜ、高島なのかと言われれば、生まれ育った所だからであったり、そこに仕事があったからであったり、この人とのつながりがあったからであったりと、高島市でなければならないといった深い理由はないが、その土地に縁があり、心地よいと感じたことで、地域を盛り上げたい、また持続可能な街にしていきたいという気持ちが芽生えていると感じた。

私は、これまで都会に移住するより田舎に移住する方が仕事の面はもちろんの事、地域住民の方が受け入れてくれるかや歓迎してくれるのかという不安があり、難しいことではないかと考えていた。しかし、実際に移住された方がいてその方と話せ不安を解消することが出来るのであれば、田舎への移住を前向きに考えられる人は多いのではない

かと感じた。出会った高島市の方は、高島市を守っていきたいという思いを持っており、移住者や関係を持つとする人に寛容であると感じた。

また、コスパ・タイパでは測れない良さもこの3日間でとても実感した。棕川地域でわら細工を教えてもらった方は91歳と高齢であるが、一人で歩け、わら細工作りの工程でも、指の力がとても強く年齢を感じさせない力を感じた。その背景には、畑での野菜作りや漬物をつけたり、手仕事を教えたりなど普段の生活の中で健康を保つ秘訣が隠されているのだと思った。

例えば、介護予防をしましょうと体操やりハビリをするのではなく、畑の作業の一環で立ったり座ったりを繰り返すことで足腰の強さが保たれているのだと思う。自分の生きがいや誇りに思っていることから健康を維持できているのではと感じた。これらを通して、一概にこれに向かってコスパ・タイパがいいからこれをしようと走るのではなかなかやりがいを持って続けることが難しいかもしれないが、自分の好きや生きがいを見つけ、それを続けることの方がかえって良い面をもたらす可能性があるのではないかと考えさせられた。

私は特別、都市に住んでいたこともなかったが、スーパーやコンビニ、自販機さえもない過疎地域に訪れていたのは初めてだった。高島市の畑地区に訪れた際、地域住民の方と一緒にカレーを作った。現地の方と話をする中で、かつてはあったお祭りなどのイベントがなくなっていることや、普段の買い物のことなど、過疎地域の実情を知ることができた。スーパーや病院といった生活基盤へのアクセスが限られていることから、都市に住む私が普段当たり前のように享受している利便性が、過疎地域では大きな問題になり得ることを実感した。

スタディーツアーでは、3 日間で様々な人と出会うことができた。過疎地域では、やむを得ず様々な問題が先送りにされてしまう現状がある中、高島では人々のつながりやふれあいのためにイベントや取り組みを行っている人々が複数おられた。

例えば、一般社団法人ぼくみんが運営している TAKASHIMA BASE では、古民家をカフェに改装し、コーヒーや本などを通じて、高島の方の集いの場となっている。そこでは度々催しも多く開かれていて、集まった人と BASE の床塗りをしたり、琵琶湖の漁師さんと一緒に湖魚を調理し食べたり、普段関わる機会がない人となることができるところになっていると感じた。宿泊させていただいた丸茂旅館のオーナーの藤野さんから、『やっさ今津』というお祭りに力を入れられていることをお聞きした。また、ぼくみんとかかわりも深い社会福祉法人ゆたか会では、ぼこふえすと称し、施設の1階で地域の人々が集まれるイベントを計画されていた。加えて、『おっきん棕川』という催しはとても印象的で、棕川の家々の軒先にお店が開かれ、里山を歩きながら地元の方と交流し、自慢の料理や手仕事品を楽しむことができる。様々なイベントや取り組み

に触れ、過疎地域での問題が顕著に出ている現在で工夫を凝らし、人々の暮らしを豊かにしている人々がいることを知れた。

実際に地元の方の話を聞くと、イベントは単なる娯楽の機会にとどまらず、住民同士の絆を深め、生活の張り合いを生み出す重要な役割を担っていることが分かった。また、こうした行事には地域外から移住してきた人や観光客も参加でき、外とのつながりを築くきっかけにもなっていた。このような取り組みは、過疎という課題を抱える地域において、住民が孤立せずに助け合いながら生きていくための知恵であると感じた。都市部では人が多いにもかかわらず、隣人との関係が希薄になりがちである。対照的に、高島市で見た地域のイベントは、人々が顔の見える関係を築くための工夫であり、少子高齢化が進む社会において非常に大きな意味を持っていると思う。

今回のツアーを通じて、過疎地域には「不便さ」や「人口減少」というネガティブな側面だけでなく、住民が自ら暮らしを豊かにしようとする前向きな取り組みがあることを学んだ。地域イベントはその象徴であり、人とのつながりを重んじる姿勢は、過疎地域ではない場所で暮らす私にとっても大切にすべき価値であると強く感じた。今後は、こうした学びを踏まえ、地域社会の課題や可能性に関心を持ち続けたいと考えている。

私は今回の高島スタディーツアーを通して、人の魅力に気づくことができた。高島市の「人」にまつわる数字だけを見ると、人口減少や高齢化が進んでいる地域というイメージであったが、実際に住んでいる人の話を聞く中で高島を盛り上げようとする人の魅力や人との繋がりの大切さを学び知った。

スタディーツアーの中で高島に移住してきた方々のお話を聞く機会があった。そこでなぜ高島に移住してきたのかを聞くと、人との繋がりで移住してきたという方が多くいた。高島に住んでいる人に誘われたから、高島で仕事をしている人に惹かれて一緒に働きたいと思ったからなど、高島市の自然豊かで住みやすい環境だけだからではなく、人が人を呼んで高島に移り住んでいることを知った。また移住してきた人の話の中で高島の人との繋がりが好きだという人が多くいた。狭いコミュニティだからこそ、ご近所同士の繋がりが強く、人との関わりが気薄になっている現代だからこそとても価値のある空間だと感じた。そして、現地で話を聞く中で地元を盛り上げようと動いている方々の存在も知った。人口約20人の集落で、「おっさん棕川」という集落に住むおじいちゃん、おばあちゃんが各家で商品を出すイベントを開催し、今では約1000人が集まるようになっている。また、高島市の今津で花火大会を運営し、毎年多くの人を呼び込めるよう活動している人もいた。その人たちはみな「若い人がまた帰ってきたいと思えるように」「好きな時に帰ってこられるように」と今は地元を出ていった人がまた帰ってこられるようにという思いを持っており、地域の繋がりを残すために活動しているのだと感じた。このように地元が好きで、その地元を残すために活動している人たちに魅力を感じて移住して

くる人がいたり、関係人口として関わる人が増えたりするのだと思った。

近年日本全体の課題として少子高齢化や人口減少の問題が取り上げられ注目されている。その中で特に人口減少が進む地域は消滅するのではないかと話題にもなるが少し失礼な話だとも思った。実際に訪ねて話を聞くとたくさんの魅力ある人がいて活動をしていた。もちろんスタディーツアーの中で田舎暮らしの大変さも知り、若者が戻ってくることの難しさや人口が減る中でどうまちづくりをしていくか考えていく必要があることも知った。しかし一方で、「また高島に戻りたい」「高島の柿を今後100年残せるようにしたい」という思いで働く若い人たちもおり、それぞれの価値観で選択してそこで生きていく人たちの存在を知った。どんなに人口が減っていても、高齢化になろうがどんな場所にもその土地を愛して住むことを決めて生きる魅力ある人たちがいるのだと思う。そういった人たちの関わりや価値観を大切にしながらこれから生きていきたいと感じた。